

青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連

——家族関係単純図式投影法を用いた研究——

小 島 弓 枝

青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連 —家族関係単純図式投影法を用いた研究—

The Relations between Perceived Family Relationships in Adolescence and Their Own Depressive Symptoms : A Study Using Figures of Family Relationships

小 島 弓 枝

【問題】

1. 家族関係の認知と精神的健康の関係について

家族とは、人間が生きていく上で重要な基盤となるものである。人はみな、それぞれに家族と関わりを持ち、家族についてその個人なりの見解を抱いている。視点をどこにおくか、スタンスの取り方でさまざまな受け止め方があり、普遍的な共通感覚的理解があるようであり、実際には個人によって家族の受け止め方には相違がかなりあるといえる（村瀬2006）。傍から健康な家族と見られていても、実際にはその家族成員にしかわからないような問題を抱えているかもしれない。その個人が認知する家族関係こそ、重要であるのではないだろうか。

家族関係の認知と精神的健康の関連について、亀口（1997）は、家族に不満を持つ児童は精神的健康度が低くなるということを指摘している。また、西出・夏野（1997）は、子どもの認知する家族機能の障害が抑うつの促進因子となることを示唆している。これらのことから、家族評価において子ども自身の認知をより重点的に見ていくことが大切であると考えられる。また、内田・藤森（2007）は、

子どもの家族認知についての理解を深めることは、子どもが日常表出しない家族環境の健全性を測る際に大切であると述べたうえで、子どもの認知スタイルに歪みがある場合にその補修を行うことが必要であると指摘している。

西出・夏野（1997）は、中学生とその両親を対象に、家族システム機能の尺度としてFAI（Family Assessment Inventory）、子どもの抑うつ尺度としてCDI（Children's depression inventory, Kovacs, 1985）を用い、家族成員それぞれの家族システムの認知と子どもの抑うつ感がどのような関係を持つかという因果モデルを検証し、子どもの認知する家族機能の障害が抑うつの促進因子となることを明らかにした。

家族関係の認知と精神的健康の関連については小学生や中学生を対象とした研究が多いが、青年期を対象とした研究として、戸田ら（2002）は、青年期後期を対象とし、家族関係と精神的健康及び精神的・身体的不適応との関連について研究している。その結果、家族関係の認知と子どもの精神的不調の間に有意な関連は見られなかったということを報告している。この理由として戸田ら（2002）は、子どもの年齢が上がるにつれ、生活の主要な

場面は家庭から学校や職場等、家庭外に移行し、そこでの対人関係が相対的に重要になると考え、家族関係の満足度が低いといったネガティブな要因が子どもに精神的健康に及ぼす影響力は年齢とともに相対的に低くなっていくことが予想されると述べている。

とはいえ、現代青年の心の問題は多様化し、青年自身の抱えている問題が、家族、特に親の抱えている問題と絡み合い、問題をより複雑化する場合もあるのではないだろうか。高橋（2008）が、青年の問題を理解して心理療法を進めていくに当たっては、その家族関係を無視することはできないと指摘するように、青年期の家族関係、とりわけ、その認知に焦点を当てることは重要な視点であると考えられる。

2. 家族関係単純図式投影法について

家族関係や家族機能と精神的健康の研究はあるが、これらの研究には家族関係の満足度や家族機能に関する尺度を利用した質問紙調査による研究が多い。しかし、北本・宮本（2003）は、個人の認知する家族関係に接近するためには、質問紙による直接的意識報告を求めるだけでは不十分であり、質問資料に加えて、投影的方法による理解を加えることが重要であると示唆している。

家族関係の認知のアセスメントツールとして、家族関係単純図式投影法というものがある。家族関係単純図式投影法は、水島（1978）によって考案された図形的投影法の一つであり、家族成員を表す一円玉大の円形コマを用いて、直径12cmの円（家族枠を表す）が描いてあるB5版の台紙に現実および理想の家族関係（家族の構造や力動など）を表現させるイメージ的投影法である。

家族関係単純図式投影法は、家族の心理的構造や家族の満足度、心理的距離に対する家族成員間の認知のズレ、現実と理想の家族関係に対する認知を視覚的に評価できる、おおまかではあるが、健康な家族とそうでない家

族をスクリーニングできる、治療過程における家族関係の変化を測定できるといった家族査定法としての側面と描画、粘土造形法あるいは箱庭療法のような治療技法的側面の両者を併せ持つという特徴がある。そして同時に、治療技法の1つとして、臨床や教育現場で容易に実施できることが明らかにされている。さらに、言語では表現しにくい家族に対するイメージや感情などを直接表現できるため、言語表現が苦手な人や幼児・児童にも実施でき、適用範囲が広いという利点がある。

この家族関係単純図式投影法を用いて、内田・藤森（2007）は、家族関係と精神的健康について児童を対象として研究した。子どもの捉えた家族関係と抑うつ状態・不安感との関連を調べ、父、母、子の3者間の心理的距離のバランスの取れている家族パターンが、3者間のうち1人が孤立している家族パターンよりも子どもの抑うつ状態・不安感の低減につながることを明らかにしている。さらに、家族に対する満足度が、子どもの抑うつ状態・不安感に影響しており、特に父子・母子間の満足度よりも夫婦間における満足度が子どもの精神的健康に影響しているということを示唆している。

【目的】

本研究では、青年期である大学生が現実および理想の家族関係をどのように認知しているかを把握し、その認知と精神的健康（本研究では抑うつ感に焦点を当てる）の関連について研究することを目的とする。

家族関係の認知を測定する際には、家族関係単純図式投影法を用いることとする。その際、家族の中でも重要な関係だと考えられる親子関係を取り上げ、家族関係単純図式投影法における父、母、子の3者間の距離を指標とする。

【方法】

調査方法及び調査協力者

四年制大学の大学生に対し、質問紙調査を行った。調査は2008年10月中旬に行われ、複数の講義で集団実施し、講義時間内にその場で回収した。本研究の有効回答数は194名（男性50名、女性145名、平均年齢20.41歳）であった。

質問紙の構成

① 家族関係単純図式投影法

調査協力者が認知する家族関係を調べるために、水島（1978）によって考案された家族関係単純図式投影法を用いた。まず、家族成員を表す円形コマ（1円玉大のシール）を調査協力者の家族の人数分与え、そのコマに家族成員（自分との続柄）を表す「私」「父」「母」「兄」などを記入させた。そして、「円は家族を表しています。普段、家族みなさんがそろっているときの家族関係を思い出して（一人暮らしの方は、家族がそろったときのことを思い出して）、誰と誰が近いか、誰と誰が遠いかを考えてシールを貼ってください。」と簡単に方法について説明し、B5の質問紙上に直径12cmの円を示した。その後、「家族について気持ちの上での距離を考えて、自分の気持ちにぴったり合うような家族を作り、円にシールを貼って下さい。」という指示を与え、現実の家族関係を図式化させた。図式作成後、その図について簡単に説明させた（自由記述）。

次に、「こうであったらいいなという理想の家族関係を考え、円にシールを貼って下さい。」という指示を与え、理想の家族関係について図式化させた。その後、その図について簡単に説明させた（自由記述）。なお、本研究では父、母、私の3者間の関係のみを分析対象としたが、家族関係をより正確に捉えるために、きょうだいなどの他の家族成員の

コマも作成させた。

② CES-D Scale 日本語版

抑うつ傾向を測定する尺度として、CES-D Scale 日本語版（島ら、1985）を用いた。「1週間の、あなたのからだや心の状態についてお聞きします」という指示文を与え、全20項目について「ない」「1～2日」「3～4日」「5日以上」の4件法で回答を求めた。

③ フェイスシート

性別、年齢、居住形態、家族構成について回答を求めた。

【結果】

家族図式として、調査協力者の家族全ての成員が含まれるものを作成させたが、本研究では、調査協力者自身とその父親、母親の3者の関係について分析を行った。それぞれのコマの中心間の距離を求め、父子、母子、父母の距離とした。

1. 現実の家族図式のパターン

① 家族図式のパターン

大学生は現実の家族をどのように認識しているか調べるために、家族図式の父子間、母子間、父母間の平方ユークリッド距離を求めて、ward法によるクラスター分析を行った。クラスターの解釈の明瞭さを考慮し、4クラスターを抽出し、「1型」「2型」「3型」「4型」とした。1型には59名、2型には15名、3型には90名、4型には20名の調査協力者が含まれていた。

各クラスターの特徴を明らかにするために、得られたクラスターを独立変数、各家族成員間の距離を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、父子、母子、父母すべての距離に有意な差が見られた（父子： $F(3, 180) = 198.9$ 、母子： $F(3, 180) = 141.17$ 、父母： $F(3, 180) = 129.27$ 、すべて $p < .001$ ）。表1、図1に各クラスター（各パターン）における成員間の心理的距離を示す。

Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、父子の距離については、3型が最も近く、次に1型が近く、2型と4型は3型、1型よりも遠かった。母子の距離については、3型が最も近く、次に1型と2型が近く、4型が最も遠かった。父母の距離については、3型、1型、4型、2型の順で近かった。

以上の結果より、1型は、全パターンの中で2番目に3者距離が近いことがわかった。2型は、母子の距離が近く、父の距離がとりわけ離れていることが特徴である。3型は、全パターンの中で3者の距離が最も近かった。そして4型は、3者の距離が最も離れている特徴があることがわかった。

表1 現実の家族パターンにおける各成員間の心理的距離および標準偏差

	1型(59名)	2型(15名)	3型(90名)	4型(20名)
父子の距離	36.03 (8.17)	68.47(16.82)	19.08(4.96)	63.35(18.69)
母子の距離	24.22 (9.39)	26.27 (9.63)	17.74(5.23)	62.65(16.59)
父母の距離	28.68(10.61)	75.60(15.59)	18.47(5.76)	43.40(21.52)

単位：mm (SD)

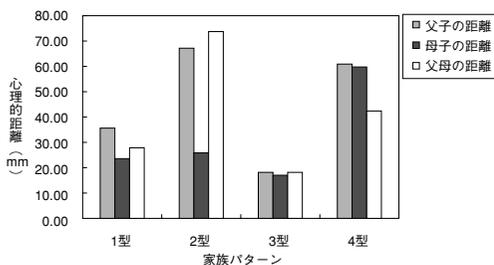


図1 現実の家族パターンと心理的距離

② 各パターンにおける自由記述

家族図式の各パターンの自由記述にはどのようなものがあるのか調べた。その結果、1型は、「近すぎず、かといって遠くもない仲の良い関係」や「適度な距離」といったポジティブな内容よりも、「父とはあまり会話がな」「父母はそれ程仲良くない」といったネガティブな記述が多かった。

2型の自由記述は、ほぼ全てが「父はみんな

と仲が悪い」「家族の仲が悪く、特に父母の仲が悪い」といったネガティブなものだった。

3型の自由記述は、「家族は仲が良い」「とても仲よし」というようなポジティブな内容を記入する調査協力者が多かった。しかし一方で「気持ち的に少し離れている部分がある」「母が少しすれちがっている」といったネガティブな記述も少数であるが含まれていた。

4型の自由記述は、「それぞれがちょうど良い距離を保っている」「みんなが均等に距離をとっている」といったポジティブな記述と「基本的にバラバラで自己中心的」「家族に心を開けない」といったネガティブな記述の両方が含まれていた。

各パターンにおける3者間の家族図式の典型例および自由記述を図2に示す。

2. 理想の家族図式のパターン

① 家族図式のパターン

大学生はどのように理想の家族関係を認識しているか調べるために、現実の家族図式と同じ方法で、クラスター分析を行った。クラスターの解釈の明瞭さを考慮し、3クラスターを抽出し、「1型」「2型」「3型」とした。1型には129名、2型には44名、3型には11名の調査協力者が含まれていた。

各クラスターの特徴を明らかにするために、得られたクラスターを独立変数、各成員間の距離を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、父子、母子、父母すべての距離に有意な差が見られた(父子： $F(3, 181) = 258.51$ 、母子： $F(3, 181) = 153.65$ 、父母： $F(3, 181) = 134.00$ 、すべて $p < .001$)。表2、図3に各クラスター(各パターン)における距離を示す。

Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、すべての距離において、1型、2型、3型の順で近かった。これらの結果より、1型は3者間の距離が最も近く、2型は3者間

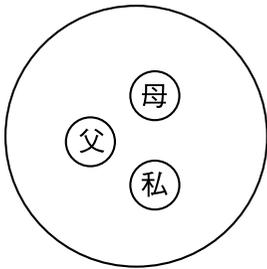
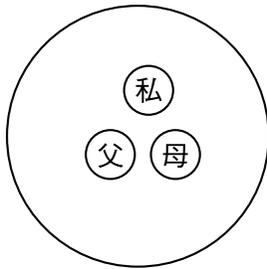
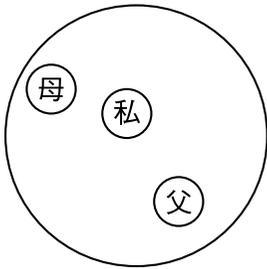
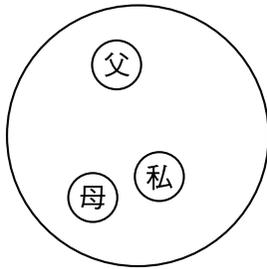
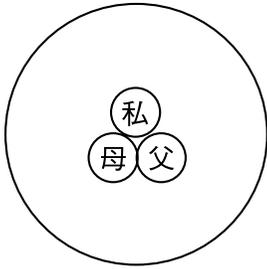
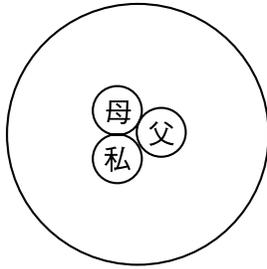
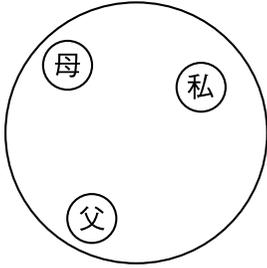
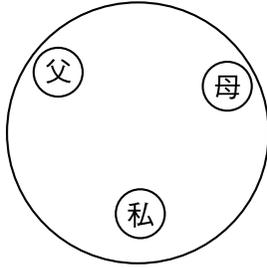
1型	 <p>【自由記述】 父とは少し距離があります。</p>	 <p>【自由記述】 近すぎず、かといって遠くない仲の良い家族。</p>
2型	 <p>【自由記述】 父と母は仲が悪い。</p>	 <p>【自由記述】 父はどの家族からも離れている。</p>
3型	 <p>【自由記述】 割と仲が良いので距離は近いと思います。</p>	 <p>【自由記述】 とっても仲良しです。</p>
4型	 <p>【自由記述】 みんなバラバラ。あまり全員揃うこともないのでごく離れている。</p>	 <p>【自由記述】 基本的にバラバラ。</p>

図2 現実の家族パターンの典型例および自由記述

表2 理想の家族パターンにおける各成員間の心理的距離および標準偏差

	1型 (129名)	2型 (44名)	3型 (11名)
父子の距離	19.24 (5.30)	30.16 (9.07)	71.27 (17.40)
母子の距離	17.60 (4.37)	30.39 (9.61)	53.73 (18.26)
父母の距離	16.18 (3.28)	29.20 (10.84)	57.36 (27.12)

単位：mm (SD)

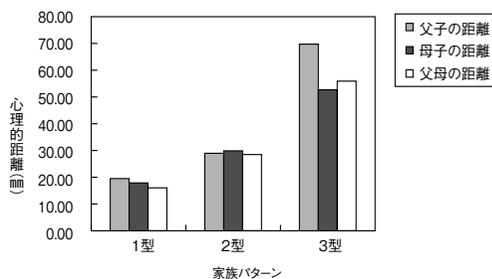


図3 理想の家族パターンと心理的距離

の距離が中程度に近く、3型は3者間の距離が最も遠いという特徴があることがわかった。

② 各パターンにおける自由記述

各クラスターの自由記述にはどのようなものがあるのか調べた。その結果、1型は、「仲良くなりたい」「さらに仲良くなりたい」という記述が大半であった。

2型は、「適度な距離」や「つかず離れずの距離」とった記述が多かった。

3型は、自由記述を見ると、「互いに干渉されない距離」や「お互いに自立し、程よい距離を保ちたい」というように自立やバランスを希望する内容の記述が多かった。

各パターンにおける3者間の家族図式の典型例を図4に示す。

3. 家族パターンにおける現実と理想のズレ

4つの現実の家族パターンのうち、どのパターンを示した調査協力者が家族成員間の距離において、理想の家族図式との間の差が大きいか調べるために、現実の家族パターンを独立変数、現実と理想の距離の差を従属変数とし、1要因の分散分析を行った。なお、現実と理想の差については、現実の距離から理想の距離を引き、絶対値をとり、求めた（ $| \text{現実の距離} - \text{理想の距離} |$ ）。その結果、父子、母子、父母、いずれの成員間の距離においてもクラスター間に0.1%水準で有意な差が見られた（父子： $F(3, 180) = 52.25$ 、母子： $F(3, 180) = 42.70$ 、父母： $F(3, 180) = 72.00$ 、すべて $p < .001$ ）。表3、図5に各家族パターンにおける現実と距離の差の平均値を示す。

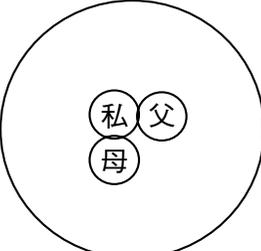
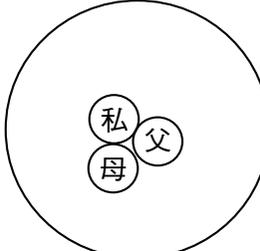
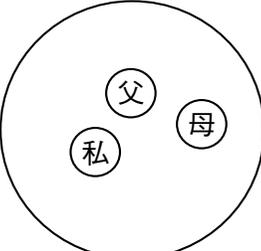
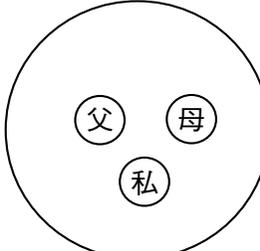
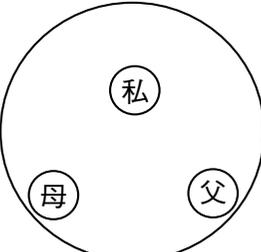
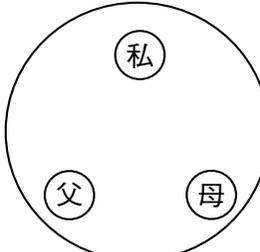
1型	 <p>【自由記述】 家族全員が仲良く1つになるように。</p>	 <p>【自由記述】 家族円満が理想。</p>
2型	 <p>【自由記述】 近すぎず、離れすぎず。</p>	 <p>【自由記述】 適度な距離を保ちながらお互いを理解出来るような家族。</p>
3型	 <p>【自由記述】 バランスがよければ。</p>	 <p>【自由記述】 とっても仲良しです。</p>

図4 理想の家族パターンの典型例および自由記述

さらに、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、父子距離のズレについては、3型が最も小さく、1型、4型、2型の順にズレが大きくなることがわかった。母子距離のズレについては、4型のズレが最も大きく、3型より、1型の方がズレが大きいことがわかった。父母のズレについては、3型が最も小さく、逆に4型が最も大きく、そして1型、4型は中程度のズレであった。

表3 家族パターン(現実)における各成員間の現実と理想の距離の差および標準偏差

類型(現実)	1型(59名)	2型(15名)	3型(90名)	4型(20名)
父子の距離	13.22(8.55)	38.53(24.64)	4.51(5.37)	21.70(16.02)
母子の距離	8.08(8.34)	7.40(9.50)	3.79(4.86)	28.60(18.88)
父母の距離	10.19(8.49)	43.87(19.91)	4.27(5.14)	15.50(16.48)

単位: mm (SD)

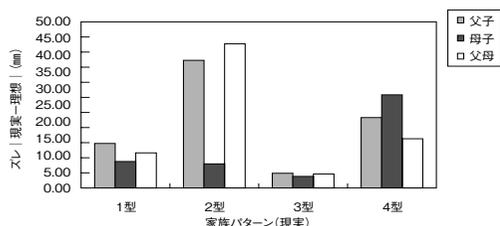


図5 家族パターン(現実)におけるズレの平均値

4. 現実の家族図式と抑うつ得点について

現実の家族図式のパターン分類によって得られた4パターンについて、抑うつ得点に差が見られるかどうかを調べるために、現実の家族パターンを独立変数、抑うつ得点を従属変数とし、1要因の分散分析を行った。その結果、パターンと抑うつ得点の間に有意な差は見られなかった ($F(3, 180) = 1.98, n.s.$)。

5. 現実と理想のズレと抑うつ得点について

現実と理想の家族図式の各成員間の距離が大きい群と小さい群に分け、両者の抑うつ得点を比較した。なお、群分けの際には、「現実の距離-理想の距離」で求めた数値を絶対値化し、そのうえでシール1枚分の距離であ

る、14mmを指標とし、14mmより大きい群を大群、小さい群を小群とし、各成員ごとに2つの群に分けた(表4、表5参照)。

ズレの群による抑うつ得点の差を検討するために、t検定を行った。その結果、母子の距離と父母の距離において、有意な差が見られ(母子: $t(44.75) = 2.11$ 、父母: $t(182) = 2.27$ 、ともに $p < .05$)、現実と理想の差が大きい群の方が、差が小さい群よりも、抑うつ得点が有意に高いことが示された。父子の距離においては有意な差は見られなかった(父

表4 各成員間のズレ群の人数

	小 群	大 群
父 子	128	56
母 子	159	35
父 母	134	50

単位: 人

表5 各成員間におけるズレ群の平均値および標準偏差

	小 群	大 群
父 子	4.76(3.97)	28.38(15.97)
母 子	3.55(3.40)	27.54(13.57)
父 母	3.80(3.79)	28.88(16.37)

単位: mm (SD)

表6 各成員間のズレの群における抑うつ得点の平均値および標準偏差

	小 群	大 群
父 子	17.59(7.82)	18.21(6.85)
母 子	17.08(7.15)	20.40(8.66)
父 母	17.02(7.35)	19.82(7.69)

(SD)

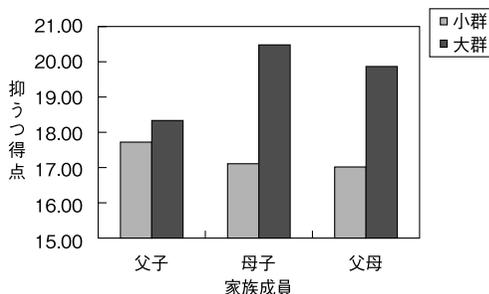


図6 ズレ群における抑うつ得点

子： $t(182) = 0.51, n.s.$)。表6、図6に各成員ごとのズレの群における抑うつ得点を示した。

【考察】

1. 青年期における家族関係の認知について

現実の家族関係の認知については、4つのパターンに分類された。各クラスターの成員間の距離の平均値を考慮し、1型から順に名前を付けるとすれば、1型は「3者中距離型」、2型は「母子接近型」、3型は「3者接近型」、4型は「分散型」と言えるだろう。

各クラスターの人数を見ると、3型が90名と最も多く、続いて1型が54名であり、調査協力者によって自由記述の内容にやや差があるものの、成員間の距離を近く認知している調査協力者が多いことがわかる。一方で、2型や4型のように家族の成員間の距離が離れて認知している調査協力者はそれぞれ15名、20名であり、それほど多くなかった。

また、理想の家族関係の認知については、3つのパターンに分類された。全体の傾向として、各成員間が密集している図式を作成する者が多かった。茂木(2003)の研究では、現実と理想の比較で、どのような現実の家族パターンを認知したとしても、理想の関係では、各成員間の距離が近い関係を望むことが示されており、これは本研究と同様の結果であると言えるだろう。亀口(1997)が、青年の理想の家族像では、構造的バランスのとれたものが多いと指摘するように、本研究においても、青年期は、距離感やバランスのとれた家族関係を望む者が多いことが示唆された。

また、現実の4つの家族図式のパターンのうち、どのパターンを示した調査協力者が家族成員間の距離において、理想の家族図式との間の差が大きいかを調べたところ、全体的な傾向として、各成員間の距離が近かった1型や3型はズレが小さく、逆に、3者の中で

父の距離が離れていた2型、3者間距離が比較的離れている4型では、現実と理想の距離のズレが大きかった。このことから、家族間の距離が近いと認知した場合に関しては、現実と理想のズレを感じていない者が多いということが窺える。逆に、現実の家族関係において離れている成員に対して、現実と理想の認知のズレを感じていると考えられる。本研究において、ズレの方向性は明らかになっていないが、前述したように、理想の家族図式において、家族成員を密集させて作図する調査協力者が多かったことから、現実の心理的距離が離れている成員に対して、理想の関係では接近を希望する者が多く、それが現実と理想のズレとして現れたと推察される。

2. 家族関係の認知と抑うつ感の関連について

① 現実の家族図式のパターンと抑うつ得点

クラスター分析によって得られた4つの家族パターン(現実)によって、抑うつ得点の平均値に差はなかった。内田・藤森(2007)の小学生の児童を対象とした研究では、3者均等距離型・3者均等中距離型のように、3者間のバランスが取れているパターンに比べて、父子接近型、母子接近型、夫婦接近型のように、父、母、子のうち、一人が孤立しているようなパターンの抑うつ傾向が高いことを示している。また、草田(2002)は、家族関係単純図式投影法に示される家族関係と、家族の健康性についての論文の中で、「夫婦の結びつきが弱く、父親が孤立し、母親が密着型においては家族の健康度が低い」と示している。

本研究において、パターンの違いによって、抑うつ得点に明確な差が見られなかった理由としては、まず、調査対象者が大学生であること、家族の発達段階の相違が関係していると推察する。すなわち、戸田ら(2002)が指摘するように、年齢が上がるにつれ、生活の拠点が、家族以外が中心となって変化してい

く段階にある青年期においては、小学生や中学生ほど、家族の影響を受けないのではないかとということである。

また、本研究における現実の家族パターンの自由記述では、1型や3型のように比較的凝集した家族図式を作成した調査協力者の中にも、自由記述でネガティブな内容を記入した調査協力者が多かったということが考えられる。同じ家族図式のパターンに分類されていても、それぞれの型の名前と一致しないような記述が何ケースも見られたことから、家族図式における、調査協力者それぞれの余白の感じ方、あるいは距離の捉え方が個々によって異なっていると考えられる。よって、現実の家族図式は4つのパターン分類されたものの、それぞれの捉え方にはばらつきがあったということが、家族パターンによって抑うつ得点に有意な差が見られなかった1つの要因となっていると推察される。

② 現実と理想の家族関係のズレにおける抑うつ得点

家族関係単純図式投影法により得られた父子・母子・父母間それぞれの現実距離から理想距離を引いたものに絶対値をとることで、現実と理想の認知のズレの指標とした。分析の結果、どの成員間の距離のズレにおいてもズレの小さい群の人数が多く、全体の傾向として現実と理想の家族関係の認知のズレが少ない者が多いということが窺えた。

母子間の距離と夫婦間の距離のズレが大きい群は、ズレの小さい群よりも抑うつ得点が高いことがわかったが、父子の距離については、ズレの群による抑うつ得点の違いはなかった。すなわち、母子関係と夫婦関係に関して現実と理想の関係に対する認知のズレの小さい群の方が大きい群より抑うつ感を感じるが、父子関係のズレの程度は抑うつ感には関係しないことが明らかになった。

各成員間のズレの平均値を見ると、父子の

ズレが最も大きかった。しかし、それにも関わらず父子のズレの群において抑うつ得点に有意な差が見られなかった理由として、自由記述において父親との関係について記述する調査協力者がかなり多かったということを考慮する必要がある。現実、理想それぞれの家族図式についての自由記述では、「父と話す機会が少ない」「父が嫌い」「父との距離がもっと近づくと良い」というように、他の成員よりも明らかに父親に関する記述が多かった。亀口(1997)は、母と子が情緒的に密着する傾向に比較して、父親は孤立しがちであるが、わが国では父親の平均的な在宅時間が短いため、孤立状態を意識化する機会は少ないと述べている。本研究では、父子距離のズレの違いにおいて抑うつ得点に差が見られなかったことから、青年期である大学生にとって父親の存在が小さく、また、父親と顔を合わせる時間が少なく、父親との関係が希薄であるという可能性が窺える。

なお、母子関係については、先行研究において、認知する母親との心理的距離にズレがあるほど、子どもの抑うつ状態を高める要因の1つになると示されており、本研究においても同様の結果が示されたと言える。

また、夫婦関係について、両親間の心理的距離がより近いように認知されるほど、子どもの精神的健康・抑うつ感の良好さにつながることを示唆する結果となる先行研究が多くみられる。本研究では、現実と理想のズレの指標について絶対値で扱っているため、ズレの方向性について述べることはできなかったが、自由記述において両親の接近を希望する記述がいくつか見られたことから、先行研究と同様となる結果を示唆することに、少なからずつながったと言えるのではないかと。

今回は、現実と理想のズレの絶対値を用いたが、今後は、絶対値化を行わず、そのズレの方向性を考慮することで、より多くの知見が得られると考える。

【まとめと今後の課題】

本研究では、現実の家族関係の距離を近いと認知している者が非常に多いこと、また、どのような現実の家族図式を描いても、理想とする家族関係の距離は接近したものになる傾向があることが明らかになった。

さらに、青年期においては、児童期や思春期ほど、親子関係のパターンやその捉え方による抑うつ感の影響を受けないが、現実と理想の家族関係に対する認知のズレがあるかどうかということが抑うつ感と関係があるということが示唆された。

本研究において、父親に対して現実と理想のズレを抱えている者は多いにも関わらず、そのことが抑うつ感に影響しないという結果となった点は注目すべきであり、家庭における父親の存在の希薄さが明らかになったと言える。青年期にとって、父親との関係のみに関して言えば、抑うつ感に影響がないが、その一方で、母子関係や夫婦関係における現実と理想のズレの認知は重要となるということである。また、現実の家族図式に注目しても、母子が密着している調査協力者が多く、青年期において母子関係が重要であると言えるだろう。母子関係に何らかの葛藤を抱いており、それが現実と理想の関係のズレとして示され、抑うつ感に影響していると推察する。また、両親の関係についての現実と理想のズレについては、理想の家族関係についての自由記述などを踏まえると、両親が近づいてほしいという接近を希望するものが多かった。

青年期の発達段階の特徴として、親からの自立があることから、この発達課題が母子および夫婦の関係のズレに反映されていると考えられる。家族に依存したい気持ちの一方で、そこから自立していかなければならないという葛藤や迷いが母子関係、夫婦関係のズレに示され、そしてそれが抑うつ感に関係してい

るのではないかと考えられる。

また、本研究において、家族パターンの違いによる抑うつ感との関連は見られなかったが、理想と現実のズレを指標とした場合のみ、抑うつ感と関連があった。このことは、理想の家族像と現実の家族像のズレが大きい小さいかというだけが要因ではないということも考えられる。家族関係に関わらず、理想と現実に大きなギャップを感じやすい人ほど、抑うつ感が高くなるという可能性が示唆される。

その他の課題としては、家族図式作成の際、個人によって距離や空白の捉え方が異なるという点があげられる。実際に、同じ図式を示している者でも、家族の距離を近いと認識している者がいれば、遠いと認識している者もいた。また、自由記述のみによって肯定的な認知であるか、否定的な認知であるか判断することにも限界があるように感じた。これらについては、調査協力者一人ひとりに面接調査を実施する、あるいは家族関係に関する何らかの尺度などを併せて用いることでその関係についてより深い知見が得られるのではないかと考える。

また、本研究の対象者が現代の青年をどれほど代表しているかは定かではない。男性のサンプルや、一人暮らしのサンプルを多く取り入れ、男女による違いや居住形態による違いについての検証を重ねていくべきであると考える。さらに、本人だけでなく、母親や父親の認知する家族関係を比較することも必要であると考えられる。

最後になるが、本実験を行った際、調査協力者の数名の方から、「おもしろかった。」「家族関係を考える機会は少ないので、今回改めて認識することができた。」「シール一つ貼るにしても考えさせられた。」という貴重な意見や感想をいただく機会を得た。確かに、家族関係について把握することで自分の家族に対する考えを感じることでできる方法と言えるだろう。今回は、集団検査という形で研

究を実施したが、個別的な形式で、面接を踏まえながら調査することで、個人が捉える家族関係や、それが個にどのような影響をもたらしているのかということをもより深く考えることができるのではないか。

本研究で、現実と理想を比較することによって、家族関係の満足度や家族の求める家族像を明らかにし、精神的健康との関連を調べたことは、家族の問題発生を予防し、早期に対処する際に役立つと考えられる。今後は、個々の家族関係の認知を捉えられるようなアセスメントとして家族関係単純図式投影法が適しているのかを再度考慮しつつ、家族関係と精神的健康についての知見を深めていきたい。

付記

本論文は、2008年度北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科において、卒業論文として作成したものに、加筆・修正したものである。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、ご指導いただきました今川民雄教授、田澤安弘教授に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 亀口憲治 1997 家族の問題 人文書院。
- 北本桜香・宮本邦雄 2004 児童の抑うつと家族雰囲気について—一親の内的作業モデルとの関連— 東海女子大学紀要、23、139-148。
- 草田寿子 1996 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 3—家族図式に表現された中学生の家族関係パターン— カウンセリング研究、29(3)、208-216。
- 草田寿子 2002 家族関係単純図式投影法：家族アセスメントの視点から 人間科学研究、24、5-10。
- 草田寿子・山田裕紀子 1998 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 VI：夫婦間の心理的距離に対する認知のズレと家族コミュニケーションとの関連 人間科学研究、20、123-

127。

- 水島恵一 1978 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ 文教大学紀要 12、1-11。
- 水島恵一 1981 心理測定、診断、治療を兼ね備えた図式的投影法 相談学研究、13(2)、1-9。
- 水島恵一・草田寿子・大平英樹・岡本かおり・柴田詠子・鈴木さとみ・田口博子 1991 パーソナルコンピュータを用いた図式的投影法による家族関係認知の評定と心理療法への応用 家族心理学研究、5(1)、79-88。
- 茂木千明 1997 家族関係単純図式投影法による健康な家族関係：予備的研究 仙台白百合女子大学紀要、創刊号、135-143。
- 茂木千明 2003 家族図式による現実と理想の家族関係の比較—家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から— 仙台白百合女子大学紀要、7、29-43。
- 村瀬嘉代子 2006 伊藤直文(編) 家族の変容とところ—ライフサイクルに添った心理的援助— 新曜社。
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子供の抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究、45、456-463。
- 高橋靖恵 2008 第2章 青年期の心理療法と家族のライフサイクル 高橋瑞恵編 2008 家族のライフサイクルと心理療法 pp. 21-50。
- 戸田弘二・牧野高壮・菅原英治 2002 青年期後期の家族関係と精神的健康および精神的・身体的不適応との関連 北海道教育大学教育実践総合センター紀要、(3)、221-233。
- 内田利広・藤森崇志 2007 家族関係と児童の抑うつ・不安感に関する研究：子どもの認知する家族関係 京都教育大学紀要、110、93-110。